

宝塚の魅力

松井秀文

「宝塚」といえば、女性ファンが圧倒的に多い演劇というイメージが強い。先日、機会があったて東京宝塚劇場にいったのだが、その時に思った事、言い換えると宝塚ファンが多い理由の一つが解ったように感じたので以下に述べてみたい。

観劇したのは、東京宝塚劇場にての宝塚宙組五月〜六月にかけての公演であった。内容は第一部がミュージカル・オリエンタール『天は赤い河のほとり』第二部がロマンチックレビュー『シトラスの風』というものである。第一部の内容は歴史ファンタジー物で小学館発行の『少女コミック』にて一九九五年から二〇〇二年まで連載された篠原千絵の同名の漫画をミュージカルに仕立て上げたものである。第二部は一九九八年の宙組誕生の際に上演されたレビューの新バージョンといったふれ込みで「シトラス」(柑橘類)のイメージを表現したものであった。

上がついていき、合唱隊の動きも激しくなり頂点に達したところで終るのであるが、そのかっこよさ(ゴスペルらしさ)は素晴らしいものであった。

我々が「ゴスペル」と呼んでいる音楽は、アメリカの黒人教会で歌われている歌である。

誰か一人が歌い出せば、会場全体が総立ちになり、手を叩いたりステップを踏んだりしながら、声を張り上げて全身全霊で歌うというイメージではないだろうか。いわゆるクワイヤ・スタイル(現在日本で最もポピュラーな、大人数三声で歌うスタイル)である。

コンサートなどで生のゴスペルを聴いたこともあるが、声の張り上げ方、バックコーラスが曲の進行に連れて体を揺すりながら一体となっていく雰囲気、ゴスペルの醍醐味のような気がする。

筆者にとつてゴスペルと聞いて思い起こすのはジョン・ランディスが監督した一九八〇年のアメリカ映画『ブルース・ブラザース』の中でみられる黒人教会でのゴスペルシーンである。曲が進むにつれて高揚状態になった礼拝者たちが踊り出す。牧師に扮したジェームズ・ブラウンの動きのキレには目を見張るものがある。このシーンを宝塚劇場での「明日へのエナジー」を見ながら思い出したのである。

イメージとして持っているゴスペルらしさというもの(曲調、歌い方、所作)をより誇張して表現されたもの。それが宝塚でのステージで観た「明日へのエナジー」ではないだろうか。

筆者は、実際にコンサート会場でみた本場もののライブよりもゴスペルらしさを感じた。その理由を考えてみたところ、水の江瀧子にまつわる一つの逸話が思い出された。それは松竹歌劇団に第一期生として入団し日本の女性歌劇史上初めて断髪した男役で「男装の麗人」の異名を取り、「ターキー」の愛称と共に一九三〇〜一九四〇年代にかけて国民的人気を博した水の江瀧子が後年日活とプロデューサー契約を結び日本初の女性映画プロデューサーとなり、石原裕次郎に映画での男らしさの演技を指導したという話である。

宝塚では特に男役を演ずる女性に人気が集まるということである。多くの宝塚ファンの女性たちは現実にはない男らしさを劇場の中に求めているのではないだろうか。そのような虚構としての男らしさを宝塚の女性たちが演じてみせる。それが宝塚の魅力の本質ともいえるのではないだろうか。今回、宝塚を観劇し、ゴスペルシーンの素晴らしさを思い出しながら感じたことである。